学校通信 耕

河北町立谷地西部小学校
令和６年９月３０日　発行
Ｎｏ.３２０

学校 HP

教育目標　　誰一人取り残さない　子供が育つ学校づくり

ウェルビーイングと自己肯定感

校長 白田 敏幸

「ウェルビーング」。最近よく聞かれる言葉である。次年度より始まる第7次山形県教育振興計画（案）においても目標として掲げられている。【*https://www.pref.yamagata.jp/documents/35772/r5iinkai4_shiryo1.pdf参照*】ウェルビーイングとは、「心身ともに満たされた状態を表す概念」であり、平たく言えば、「幸せ」と捉えることができる。学校の教育活動においても、子供はもちろんのこと、学校に関わる全ての人の「ウェルビーイング（幸せ）」が求められている。ただし、ここで確認したいのは、**「一人一人の『幸せ』は違う」**ということである。大人がこれまでの自分の経験から、「幸せになるために必要なこと」と思っているものが、必ずしも全ての子供たちには当てはまらない。「自分のこれまでの経験から、幸せに暮らしていくためには、これが必要だ。」と思い込み、子供に無理やり押し付けることのないように気を付けたいと教職員間で確認しているところである。

幸せに生きることは誰もが望んでいることであり、そのために仕事をしたり学んだりしている。学校教育において一番に考えなければならないことは**「子供たちの幸せ」**である。子供たち一人一人の幸せを実現するために日々教育活動を行っているわけだが、その中でも特に大切にしているのが、**「自己肯定感の向上」**である。これも、あらゆる場面で言われ、聞かれる言葉である。「自己肯定感を向上させるための方法」としてよく言われるのが、「子供を褒めること」ではないだろうか。「がんばったね。」「よくやったね。」「すばらしいね。」等々、言葉をかけられた子供はきっとうれしいことだろう（と思っていた）。しかし、昨年度、ある学年で授業をしたときに、こんな衝撃的なことを子供が話していた。*（どんな状況下であったかの記憶は定かではない。）***「大人ってね、何でも褒めればいいと思っているんだよね。褒めてほしい時に褒めてくれなかったり、どうでもいい時にわざとらしく褒めてみたり・・・。あんまり、子供をなめないでほしいよね。」**学校や家庭で何かあったのかは知らない。特に誰かに向けた言葉ではなかったと思うが、私は何も言えずに教室から出てきてしまった。我々大人がこれまでよしと思っていたこと、子供のためを思ってしてきたことのある部分が、大きく否定されたのである。

自己肯定感には、大きく6つの「感」が大事だとされている。（中島輝 著 「自己肯定感の教科書」より）

①自尊感情：自分には価値があると思える感覚	**「自分っていいよね。」物事を肯定的にとらえる。**
②自己受容観：ありのままの自分を認める感覚	**「自分は自分。あなたはあなた。」と受け入れられる。**
③自己効力感：自分にはできると思える感覚	**「なんでも挑戦しよう。」失敗はがんばった証**
④自己信頼感：自分を信じられるという感覚	**「自分はできる！」再び立ち上がることのできる力**
⑤自己決定感：自分で決められる感覚	**「自分で決めた！」の積み重ね**
⑥自己有用感：自分は何かの役に立っているという感覚	**「誰かの役に立ち、喜ばれる」経験**

自尊感情は、ただ褒めるだけでは向上しないことが分かる。【*アドラー心理学においては、「ほめる行為には『能力のある人が、能力がない人へ下す評価』という側面が含まれる。『ほめる』の背後にあるのは、相手を操作したいという思いである。」と言われている。*】決して褒めることを否定するものではないが、本校においては、**「認める」**ことを大事にしている。「褒めること」と「認めること」は似たようなものであるが、決定的に違うのは、「成果や結果に目を向ける」か「過程に目を向ける」かであると考えている。だから、結果を褒めることも当然あるが、それ以上に、子供の行動一つ一つを認めるとともに価値付けることを大切にしなければならない。認める内容としては、「意欲」「努力」「プロセス」「伸び」等である。もっと極端に言えば、やらなくても、やろうと思ったそのこと自体をも認めるのである。*「『今、やろうとしたよね。やろうとしたこと自体、私はうれしいな。』等」*そのために、どうしても必要になってくることが、大きく2つあると考えている。

１つ目は、「比較するのは『過去のその子供』である」ということである。たとえ1mmであっても、その子供の伸び

に目を向けるようにしたい。ある基準と比較し、挑戦させていくことも、厳しい社会を生き抜いていく上で必要ではあるが、**自尊感情の向上を目指すのであれば**、比較対象を他に向けることだけではいけない。どこまでいっても上には上が必ず存在し、ともすると、自分よりできない人を見付けてしまうようになるからである。（例として、「運動会において、『〇〇君に勝つ!』という目標を立て、確実に自分よりできない友達を見付け、自分の位置や立場を確立し安心しようとする。もし自分がその対象とされたらどう感じるだろうか？また、比較されたその子のプライドはどうなるのだろう？）

2つ目は、我々大人の**「子供をみとる目」**である。このことについては、学校だよりを通して繰り返しお示しさせていただいている。大人にこの目がなければ、子供の行動をみとり認めることなど到底不可能であると考える。

自己肯定感が高い子供は、決して**常に**ポジティブなのではなく、ネガティブになった時に、自分自身で気持ちを奮い立たせることができる。結果、自己肯定感が高い子供は、前に示した「6つの感」をもって**自分で自分自身を幸せにする（幸せを感じる）**ことができるようになるのではないだろうか。

7月末に実施した学校評価における本校子供の自尊感情の項目については、評価の高い子供がほとんどではあったが、10%強の子供は「自分によいところがあるとは思わない。」と答えている。この事実をしっかりと受け止め、教職員間で手立てについて話し合い、2学期の教育活動を進めているところである。

本校の学校だよりでは、子供たちの様子を伝えるだけでなく、校長としての考えをお示ししているところです。お電話でも結構ですし、ご来校いただいても結構ですので、校長の考え方対しましてご意見等を頂戴できれば、学校経営の参考としたいと考えています。よろしくお願いいたします。

地域行事への参加　伝統を引き継ぐ　～弥冨子地蔵堂奉納相撲～

8月25日（日）、弥冨子地蔵堂において、地域の行事である「弥冨子地蔵堂奉納相撲」が行われました。本校からも多くの子供が参加し、力強い相撲を披露しました。

もともと、本校においても令和元年まで相撲大会が行われていましたが、新型コロナ感染症の流行や学校行事の見直し、相撲場の老朽化等の理由により、相撲大会を廃止していました。

しかし、子供たちの地域行事への参加促進や郷土愛を育む観点から、昨年度、地域の方を講師として学校にお招きし、弥冨子相撲についての話をお聞きしたり、実際に地域の方の土俵入りや弓取りを見せていただいたりする機会を設けました。さらには、子供たちも体育館でではありますが、子供どうしで相撲を取ったり、一人の大人に多くの子供が一斉に勝負を挑んだりなど、相撲の楽しさを味わいました。学校と地域が連携しながら郷土愛を育むことができていると感じているところです。

子供相撲の最後には「弓取り」を行いました。今年度は、「6年児童　宇野陽翔さん」がその役を務めました。練習には、昨年度弓取りをした中学生が指導にあたってくれたようです。このようなところにも、「地域の中でのつながり」が表れていると感じているところです。

昨年度より、女子の取組みも実施するようになりました。

三人抜きの商品は、カップ麺１箱です。

堂々とした「弓取り」です。「よいしょ！」の掛け声が地蔵堂に響き渡りました

「朝日少年自然の家」での宿泊学習　～助け合い励まし合った　2日間～

9月17日（木）18日（金）1泊2日で、宿泊学習を行いました。子供たちは、協力し合って思い出に残る宿泊学習にするために計画を立て、何度も話し合いをもちました。初日は予定していたプログラム（テント設営、自然の冒険、炊飯活動、キャンプファイヤー）を実施することができました。ただ、夜からの雨が心配されたため、テントを体育館に張ったり、炊飯棟にハチの巣があるため、体育館の脇の広場で炊飯活動を行ったりと、様々なハプニングがありましたが、そんな中でも声を掛け合いながら協力して活動できました。二日目はあいにくの雨。ウオークラリーを変更して火起こしを体験しました。なかなか火を起こすことができず苦労しましたが、協力することの大切さは学べました。この2日間、子供たちは非常に貴重な体験をすることができました。ここで学んだことが、学校生活はもちろん、今後の一人一人の「生き方」にも大きく影響してくると思っています。

テントは体育館に張りました

自然の冒険にいざ出発！

初日の昼食はお弁当

夕食の準備　メニューは「カレーライス」です

キャンプファイヤー

寝袋にくるまっておやすみなさい

朝食はハンバーガー

火起こし体験

移動お話会 「と～んとむがぁすぅ、あったっげど。」

8月30日（金）に移動お話会を実施しました。子供たちが楽しみにしている毎年恒例の活動の一つです。「河北べにの里昔語りの会」から3名、「ひまわりサークル」から7名の方にご来校いただきました。学級ごとに、「とんとむかし語り」「絵本の読み聞かせ」「絵本の紹介」をしていただきました。

45分という短い時間でしたが、昔語りや読み聞かせに没頭する子供たちの姿がありました。読書離れが課題とされている中、貴重な体験をすることができました。子供の読書離れを解決する一番の近道は、大人がたくさんの本に触れることなのかもしれません。学校においても読書活動を推進するだけでなく、教職員が本を手にする機会をできるだけ多くもちたいと感じたところです。

トライアングルコーナー

PTA親子作業 ～ガラス磨き～

8月25日（日）6：00から、PTA親子作業を実施しました。PTA組織再編により、保護者の方が集まる機会が減ってしまいましたが、この日は多くの方からご協力いただいたことで、PTA活動として貴重な機会になりました。*（ご夫婦で参加してくださる方がほとんどで、ここが谷地西部小学校PTAの方々の素晴らしいところだと思います。）*

初めに、床クリーニングのため、教室から出していた荷物（机やロッカー等）を元に戻していただきました。これまでは職員で時間をかけて行っていましたが、保護者の方や子供たちから手伝ってもらったおかげで、短時間で終わらせることができました。

ガラス磨きは、日常の清掃活動の中で行わなくなっています。年に一度の作業できれいにしていただくことで、気持ちのよい環境で教育活動を行うことができます。学校にでは、非常にありがたく思っているところです。朝早くからの作業、大変ありがとうございました。